

特集にあたって[†]

— その背景と学会誌として取り上げる意義 —

藤井 暢純*

1. はじめに(背景)

デミング賞の歴史の中で、企業の経営戦略にとってのコアとなっているマネジメントである方針管理について、原点に戻って基本事項と歴史、課題について検証し特集することにした。

デミング賞のしおりの中ではデミング賞受賞企業の姿として3つの要件が挙げられている。要約すると

- (1) 積極的な顧客志向に基づいた経営目標と戦略の策定
- (2) その実現のために TQM の適切な実施
- (3) 結果として効果を出すこと

となっている。(1)の「経営目標と戦略の策定」とは「方針管理」そのものであり、(2)の「その適切な実施」、(3)の「効果を出す」ことは方針管理のPDCAをしっかりと回すことで実現することある。

どのようにPDCAを回しているのか、またどのような課題、新たな問題を抱えているのかについて本学会としては大変興味があり、知りたいと思う。

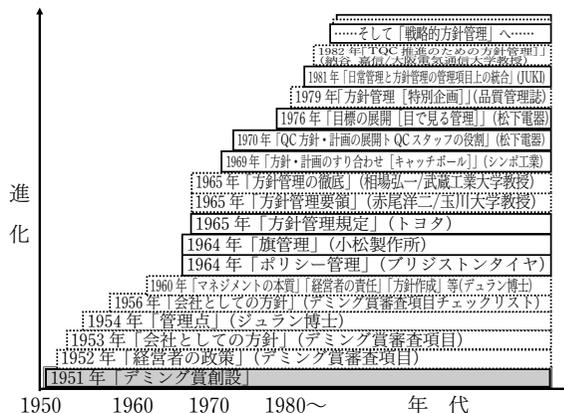
2. 学会誌として取り上げる意義

2.1 歴史的視点からの意義

今回の方針管理の特集は1963年に「方針」がデミング賞審査項目に導入されてからちょうど50年目という節目となる年である。

「品質」誌(Vol.40.No.1, 2010)で「品質管理事始め(ルーツを探る)」の特集の中で「方針管理」については、小浦孝三氏により源流から発展期についての経緯について詳細に書かれている。

簡単にその歴史を振り返ると、「1951年にデミング賞が創設され、以降その審査項目に「方針」という項目が取り上げられ、1960年台に入りデミング賞受賞



図・1 方針管理の歴史～デミング賞創設から方針管理発展期まで～

企業の「プリジストンタイヤ、小松製作所、トヨタ、シンボ工業」等でその基本的仕組みが構築された。1970年代からは松下電器産業等で「方針展開、目で見える管理」等が付加され、1980年代には「JUKI、日本電気(山梨工場)」等で日常管理と方針管理の管理項目上の統合・併合が行われ、1982年に『TQC推進のための方針管理(納谷嘉信氏/日科技連出版)』が発刊され、それまでの問題点を整理し、「新QC七つ道具を用いる方針管理システム」として体系化がされた。その後1987年から日本品質管理学会において方針管理事例研究会、1989年には「方針管理運営の手引き」を作成、方針管理の今日における基本的考え方、事例集が提示された。そしてその後の「戦略的方針管理」へとつながっている」ということがわかる。

2.2 今日の視点から取り上げた意義

昨今の「社会環境、経済環境、自然環境」等の著しく変化している中で日本企業はどのように対応しているのか、どのように進化しているのか、どのような課題を抱えて進めているのか、学会誌としてその方針管理の変化を取り出して特集するという機会は久しくなかったことである。

ぜひ本特集を参考に、各企業の経営管理及び品質管理の研究・実践にご活用いただければと思う。

[†]平成23年12月26日 受付

*サンデン株式会社

連絡先: 〒110-8555 東京都台東区東2-31-7(勤務先)